

月刊

AMDA

国際協力

Journal

5

MAY

2005.5

(VOL.28 No.5)



インドネシア・ニアス島地震緊急救援活動 (2005年3月29日～)



被災地ニアス島



救援物資配布



緊急整形外科手術



巡回診療



AMDA 国際協力 Journal

2005
5月号

CONTENTS



表紙の写真：
インドネシア・ニアス島地震緊急救援
活動 巡回診療

医薬品をバンダアチェへ

インドネシア・バンダアチェのザイナルアビディン病院に医薬品を届け
た小林真理（AMDA ボランティア：
左から二人目）。左から三人目はザ
イナルアビディン病院長。

（詳細は下記関連記事参照）



◇インドネシア・ニアス島地震緊急救援活動	2
◇スマトラ沖地震・津波緊急救援活動	3
◇ネパールの今	6
◇AMDA『魂と医療のプログラム』	8
◇アフガン難民支援—難民の声—	16
◇神奈川支部便り	17
◇寄付者名簿	18
◇AMDA スタディツアー	19

インドネシア・ニアス島地震 緊急救援活動

3月28日にスマトラ沖で発生したマグニチュード8.7の大地震は、インドネシア・ニアス島に大きなダメージを与えました。

先の津波被災地への復興支援を開始しようとしていた矢先の出来事でした。

AMDA 本部ではインドネシア支部とともに医療チームを派遣し、ニアス島で最大の病院であるグヌンシトリ総合病院で被災者への緊急整形外科手術や応急処置を行いました。

電気や水道などのインフラが壊滅状態であったため、手術は困難をきたしましたが、スタッフの様々な工夫により、負傷者の処置を行いました。

また、巡回診療を行い、支援物資も配布しました。

日本からの派遣者、津曲医師と小堀看護師は、水の不足が治療の一番の妨げであり、島民の生活基盤でもある水道の、一日も早い復旧の必要性を報告しました。

AMDAチームは、グヌンシトリ総合病院のスタッフの方々の復帰を目途にニアス島での緊急救援活動を終了します。

今後はインドネシア・バンダアチェにおける復興支援を開始していきます。

スリランカ、インドにおいても同じく復興支援活動を開始します。引き続きご支援をお願いいたします。

募金のお願い

AMDA では皆様のご支援をお願いしております。
郵便振替 口座番号 01250-2-40709 口座名「AMDA」
※通信欄に「インド洋津波」とご記入下さい。

医薬品をインドネシア・ スマトラ島バンダアチェへ

AMDAは、AMDA沖縄支部の呼びかけでご提供いただいた医薬品（胃腸薬、抗生剤、健胃消化剤など）を、4月1日、インドネシアの地震・津波被災地バンダアチェにあるザイナルアビディン病院へ引き渡しました。

同病院のルス・ムナンダール院長は、「AMDAからの寄付は大変喜ばしく、感謝しています。今後とも友好的な関係を築いていきたいと考えております。また、先日の地震で被害の大きかったニアス島に必要な医薬品があれば送りたい。」とのコメントを寄りました。

<ご提供いただいた企業>

株式会社那覇薬品様 株式会社南西薬品様
株式会社琉球光和様 大洋薬品工業株式会社様
ニプロファーマ株式会社様 有限会社だるま商事様

<輸送ご協力>

国際移住機関 (IOM) 様
日本トランスオーシャン航空株式会社 様

(五十音順)

書き損じハガキを集めています

*書き損じのハガキ、未使用の切手・ハガキ、各種プリペイドカード等がありましたら、AMDAにお送り下さい。

*使用済テレホンカードは収集しておりません。

【送り先】岡山市榎津310-1 AMDA事務局

※お問い合わせは、TEL 086-284-7730
FAX 086-284-8959

インドネシア・ニアス島地震緊急救援活動

ニアス島で AMDA 緊急医療支援実施

再びスマトラ沖で3月28日に発生した大地震による最大の被災地インドネシア・ニアス島に、AMDAインドネシア医師団5名が31日到着し、中心都市グヌンシトリにあるプスケスマス(保健所)にて緊急外科手術など医療支援を開始した。

輸血が必要な重症患者などはシボルガやメダンなどへ移送されていた。現地からの報告によると、医師や看護師など医療従事者が不足している他、車両とガソリン、発電機、医薬品、医療消耗品、食料、水などが求められていた。

中継地となるスマトラ島・メダンに31日朝到着した松永一調整員は、メダン総領事館橋廣治総領事に面会し、今後の活動に対して支援のご協力をお願いした。その後、医薬品・医療消耗品など支援物資や生活物資の購入、派遣者の受け入れ準備などに従事した。4月2日、松永一調整員とAMDAインドネシア支部の医師は、医薬品、医療消耗品、ガソリン、発電機、水や食料などの支援物資を積んだ車輛2台で、スマトラ島・メダンから輸送拠点となっているシボルガ(ニアス島対岸)へ陸路で向かい、3日に到着、直ちに、医薬品、医療消耗品、ガソリン、水や食料などの支援物資(約2トン)を積んだ車輛2台の受入れ、現地のニーズ調

査、巡回診療の準備業務に従事した。同様の支援物資はさらに4日、AMDAインドネシア支部の医師とともに、約4トン到着した。

<物資調達ご協力(メダン)>

株式会社セツヨウアステック様代理店のメダン支店
(PT.KRIDA PUJIMULYO LESTARI)
General Manager Ms.Pauliana,SE

また、4月1日、AMDA本部から派遣された津曲医師と小堀看護師がインドネシア空軍の小型機でニアス島に到着し、緊急手術と応急手当を開始した。二人は先に到着していたAMDAインドネシア医師団とともに、グヌンシトリ総合病院(ニアス島で一番大きな病院)で、指に大けがをした女性の手術を行った他、次々に運び込まれてくる外傷患者の治療に従事した。電気、水道などインフラが壊滅状態で、応急処置以上は困難な状況であった。

今回のAMDA多国籍医師団は、グヌンシトリ総合病院に滞在し、支援活動を実施。同病院は、AMDAインドネシア医師団の団長を務めている外科医のパトゥルーシ教授の指揮の下、外科の機能復興、システム再構築にも尽力した。

3日、パトゥルーシ教授はヘリコプターでニアス島北部に向かい、診療を行った。6日からは、中心都市グヌンシトリ近郊の山間部、AMDAが活動拠点としているグヌンシトリ総合病院から自動車で約20分の所に位置しているデサ・ディマで巡回診療も開始した。

呼吸器疾患、塩分の摂取過多による高血圧症の患者が多く、また、ほぼ全員に寄生虫、貧血、そして関節炎の症状があり、中には結核の疑いのある患者もいた。診療した患者数は101人で、ビタミンAの欠乏等、栄養のかたよりも見受けられたため、子ども全員にビタミンAカプセルを配付した。

<ニアス島への派遣者>

松永 一 調整員 AMDA本部職員
津曲 兼司 内科医 医療法人アスカ会
AMDA緊急救援医療事業シニアアドバイザー
小堀他津子 看護師 医療法人アスカ会
AMDAインドネシア医師団 計7人
団長：イドラス・パトゥルーシ
ハサヌディン大学医学部教授、外科医・麻酔科医

山陽新聞 2005年4月4日 月曜日

スマトラ沖地震被害のニアス島 負傷者治療に全力 AMDA(岡山)医師ら

て話し掛けた。「きっと歩けるようになるよ」。照れたような笑顔を見せるスムラアティさん。ベッドの横にいた十四歳の娘も、ほっとした表情を見せた。

スムラアティさんは地震の被害で足の指先が何かに挟まれて灰色になった状態だった。ひどい痛みを訴え、二日運ばれてきたときには、既に感染症が広がる恐れがあり、津曲医師らには指の一部を切断する手術をした。

津曲医師と看護師小堀他津子さん(三)は、一日にニアス島入り。総合病院を拠点に活動を続けている。病院の医師らはほとんどいない状態で、マレーシアなどの医師とともに、連日手術に携わっている。

【グヌンシトリ(インドネシア・ニアス島)3日共同】スマトラ沖地震で大きな被害を受けたニアス島。中心都市のグヌンシトリにある総合病院は、医師や看護師がほとんどいない状態だったが、日本を含む各国から医療関係者が入り、負傷者の治療に当たっている。

国際医療ボランティアAMDA(本部・岡山市檜津)から派遣された津曲兼司医師(四)は、二日手術したスムラアティ・ダリさん(三)の術後を見

津曲医師は「発生から数日たって島に入ったが、思ったより新しい傷の患者が多い。遠隔地から運ばれてきている人が多いのではないかと推測。「水も食料もすべて足りない。この病院できちんとして手術できる態勢を整えたい」と話していた。

緊急救援から復興支援に向けて

(インドネシア)

調整員 金山 夏子

はじめに

1月6日、津波から11日が過ぎようとしていたその日の午後、私はAMDAの調整員として、約3ヶ月間の緊急医療支援活動の拠点となるバンダアチェ市内ザイナルアビディン病院へ到着した。一回目の派遣期間は1月3日から24日までの22日間、日本への一時帰国を経ての二回目の派遣が2月13日から3月25日までの41日間、更に今回、三回目の派遣のため4月6日に日本を出発した。活動を開始した1月当初、汚泥と瓦礫に覆われた市内で民家や商店は閉ざされ、津波の傷跡が町と人の心に「あきらめ」となって残っていた。わずか2ヶ月余りで市や病院の機能がこれほどまでに回復するとは誰が当時想像できたであろう。インドネシアの人々と国際社会による協力の賜物であるに違いない。そして、AMDAもその協役に重要な役割を果たしたのである。

津波の直後、ザイナルアビディン病院の支援に駆けつけた最初の支援機関として、AMDAインドネシア支部の医師たちは自ら医療活動を行うのみならず、病院支援を申し出る各国の衛生軍や国際機関、NGOをコーディネートする中心的な役割を果たしていた。そのAMDAインドネシア支部を支援するため、各国支部から派遣されたAMDA多国籍医師団の医療スタッフは、それぞれの経験と専門分野を活かした適所に配置され、病院や避難民キャンプでの支援活動を開始する。

インドネシア政府が国際支援活動を認めるために設けた緊急フェーズの3

ヶ月間、AMDAは常にインドネシア政府と国連機関（医療に関してはWHO/UNICEF）との連携を「リーダーシップへの協調」として、またAMDAインドネシア支部と地元コミュニティとの繋がりを「パートナーシップの尊重」として重視した。従って、混沌とした状況の下、凄まじい速さで展開される緊急支援活動のさなかであっても、その時その都度、政府や国連が何を優先課題とし、NGOに何を期待し、そしてコミュニティが何を必要としているのかを活動内容決定の基準とすることができたのである。その結果、12月27日から3月24日まで一貫して継続された支援活動は、状況に応じた四段階に区分される。緊急支援物資の調達と配布及び病院内での医療活動を中心とした第一段階、巡回診療と感染症予防を重視した第二段階、医療活動と併せ遠隔地の状況と医療ニーズの調査を実施した第三段階、社会活動や医療知識の教育活動等を含む支援活動へと発展させた第四段階である。今回は特に、第三、四段階の報告に重点を置かせていただきたい。

第三段階

現地における医療ニーズの調査

第二段階においてUNICEFと協力し展開していたはしかワクチンの予防接種活動を終え、アチェ人の看護師を迎えたAMDA多国籍医師団（インドネシア・ネパール支部、本部）は、バンダアチェ市と周辺のアチェサル県を中心に巡回診療を行っていた。市内中心部における病院の機能が回復し外来数が増加する一方、交通手段の不備から市郊外の住民に対する医療サービスが決して十分ではなかったためである。アチェ州全体では緊急支援活動が終局を向かえ、復興支援への移行がしきりにアピールされていたが、バンダアチェ市内でさえ緊急フェーズから復興支援へと発展させる速度には地域差があり、コミュニティ間には支援のギャップが生じていた。そのよう



な問題は遠隔地でより深刻であることが予想されたため、AMDAとして緊急支援活動フェーズの最終月である3月の活動内容の一つに、支援の地域差を埋めるためのフォロー・アップという意義を含めた遠隔地での活動実施を決定した。その候補地の選定には、AMDAのパートナーとして協力関係にあったスラウェシ・スルタン（インドネシア西部のスラウェシ島マカッサルから派遣されている支援組織）や国連機関からの情報を元に、東海岸ピディ県ジャンカブヤ、スマトラ島の北に位置するサバン島、西海岸アチェ・ジャヤ県サンポイニエツの3ヶ所に決定した。以下が調査結果の要点である。

《ピディ県ジャンカブヤ》

津波の直接的被害を受け避難民が発生したが、慢性的貧困、地理的条件、反政府ゲリラの独立アチェ運動（GAM）に関するセキュリティーの問題から、津波後も十分な国際支援を受けることができなかったため、避難民キャンプでの巡回診療が必要であった。

《サバン島》

局地的な津波の被害を受け避難民がキャンプでの生活を継続していたが、国際NGOが提供してきた医薬品に関する誤った噂や認識があったため、医療トレーニングが必要とされた。

《アチェ・ジャヤ県サンポイニエツ》

西海岸において最も深刻な津波被害を受けた地域の一つであったにも関わらず、交通経路の遮断とGAMに関するセキュリティーの問題から支援活動が困難な地域であった。特に、歯科医と眼科医のニーズが非常に高かった。

第四段階： 遠隔地での支援活動

遠隔地では、ヘリコプターやポートといった交通手段の確保、他のNGOが地域にもたらした医療支援に対する偏見や誤解、外国からのNGOとイン



ドネシア側からのNGOとの間における方針の行き違い等、活動に際し運営上の問題に多々直面したが、どのような場合においても、その地の慣習を尊重し関連アクターが互いに納得する対話を通じた活動運営をAMDAは目指してきた。他のNGOとの協力による情報交換や交通手段の共有、合同診療といった、バンダアチェ市のような中心部では見られないような活動形態は、そこで得ることのできた経験の一つと言えよう。

各地において避難民キャンプを中心に巡回診療を行い、皮膚疾患がどの地域でも多く見られたが、その原因や解決には衛生環境も関わってくることから、必要性に応じては衛生問題に関する



巡回診療

るトレーニングも行った。西海岸のサンボニエツでは、アチェ・ジャヤ県全体で歯科医が不在ということから、歯科医と眼科医のニーズが大変に高く、インドネシア人の専門医を派遣し仮設診療所での集中的な活動を実施した。やはり津波後、これまでにないほどの数と種類の医薬品がコミュニティーに入り込み正誤の情報が入り乱れていたため、コミュニティーに頻繁にみられる疾患と投与すべき薬に関するトレーニングへの要望が高く、村長や避難民キャンプ・リーダー、地域の母親を対象にした医療知識の教育をジャンカバヤとサバン島において実施した。

第四段階

ソーシャル・アクティビティー

遠隔地における医療ニーズの高さとは対比的に、バンダアチェや周辺のアチェ・ブサル県では巡回診療の際、疾患を訴える患者数が低下し、健康診断や精神的な問題を訴えるケースが増加していった。また同時期、WHOとUNICEFが精神ケアや避難民キャンプ

でのソーシャル・アクティビティーを実施する重要性を訴え始めていたが、これは、津波から2ヶ月が経過し、定着しつつあるキャンプ生活において持て余す時間が増え、トラウマやストレスが精神不安定の要素になりうるといった点を問題視しての対策であった。そのような状況を受け、AMDAとしてもバンダアチェ市とアチェ・ブサル県内での巡回診療を終え、二つのソーシャル・アクティビティーを実施した。

〈移動図書館〉

AMDAがこれまで巡回診療で訪問していた避難民キャンプや村、またその地域の子供たちが通う学校へ移動図書館として訪問することを立案。現地の価値観や宗教観を尊重する上でアチェ人のスタッフが図書館の本を選定し、各コミュニティーとの連携に奔走した。常時約250冊以上の本を用意し、活動を終了した3月24日にはコミュニティーへ寄贈した。

〈PYP : Persahabatan-Yujo Project〉

Persahabatan とはアチェ語で友情という意味であるが、この名前が示すように

PYPは、アチェと日本の子供たちが絵やメッセージ、写真の交換を通じて励まし合い、友情を育む機会を提供することを目的とした。アチェの小学校と避難民キャンプを訪れ、日本には地震や津波の被害が多く、同じような問題を抱え乗り越えてきた子供たちがたくさんいることを紹介する。また、阪神大震災で被害者となられた日本人の学生を招待し体験談も語られた。それを受け、日本の子供たちへのメッセージとしての絵が描かれ大阪と岡山の小学校へ届けられた。そこにおいても今回の津波被害に関する学習会が行なわれ、アチェからの絵のお返しとして、日本の子供たちから励ましの絵が送られた。それらがアチェに届けられ、再びアチェの小学校と避難民キャンプを訪問し、日本からのメッセージとして届けることができたのである。

自分たちの絵が日本の小学校で紹介されている写真を目にしたアチェの子供たちは、大喜びで自慢し合い、返事として届けられた日本からの絵に見入っていた。その心の中で、「自分たちの辛い思いを分かろうとしてくれる友人



友情プロジェクト (PYP)

が日本にもいる。アチェにいる自分たちは一人で苦しんでいるんじゃない。」と感じてくれていることを願わずにおれなかった。

終わりに

緊急支援活動としての3ヶ月が過ぎようとしていた3月24日、AMDAも全ての短期プログラムを一切無事故で終了することができた。一緒に活動をしたアチェ人のスタッフはいつもこう口にしていた。「国際支援がなければ、私たちは何をすることもできなかった。たくさんの人々がたくさんの国から来てくれたおかげだ」と。ヘリコプターとボートを乗り継ぎ活動した地域の避難民や住民は、こう言葉をかけてくれた。「AMDAは我々の要望を聞いてくれた。こんな所まで来てくれてありがとう」と。しかし、全てを失った状況においても、再び立ち上がろうとする人間の強さを教えてくれたのはアチェの人々だ。人は強い。前に進もうとする力を、最大限に応援し支える我々も強くなければ。「困った時はお互い様」というAMDAの心で、アチェの人々と同じ視線で立とうとする時、「届けられる支援物資」「提供されるサービス」という枠を超え、その応援したい気持ちが真っ直ぐに通じるということを学んだ3ヶ月であった。

この4月、AMDAは長期支援復興の立案にとりかかる。難民キャンプや村の人々の隣にいる気持ちで、「彼らは何を望んでいるのか」「彼女らのためにできることは何か」、その視点を見失うことなく引き続き取り組んでいきたい。

岡山・ジャカルタ ロジスティックス(後方支援)の現場から

AMDA広報室 奥谷 充代

怒涛の日々が始まる

2004年12月26日夕刻。スリランカ、インドネシア、インドで緊急救援活動実施決定。

私たち岡山の本部スタッフは、AMDA各国支部や世界各国からの派遣決定者・予定者・希望者とEメールや電話でやりとりをしつつ、決定者の航空券と滞在先の手配をし、医療消耗品や支援物資など日本人派遣者の持参物の購入・パッキングを行い、保険会社と契約を行う。そして、現地からの報告を元に、報道機関と関係機関向けの速報を作成しFAX配信をする。続けてメルマガ原稿を作成して送信し、ホームページにアップする。同時に英文翻訳して海外の関係機関に送信。派遣者の帰国後は、記者会見を行い、経費精算をチェックする。この他にも状況に応じてしなければならないことが数多くある。現地の状況、ニーズは刻々と動くので、随時ミーティングで意思疎通を図り、新規事項を決定する。お正月返上で取り組み、インドネシア・ニアス島への緊急救援を実施している現在まで続けている。

1月1日夜、私も急きょ後方支援のためジャカルタへ派遣されることが決まった。業務を引き継ぎ、同じ日に出発する2名と自分の航空券及び滞在先のホテルを予約し、フリーメールを取得。その後大阪の実家に寄って荷物をまとめて、3日関西空港14:40発の飛行機で向かった。

“Perfect!” “No problem!”
「大丈夫です！」

ジャカルタでの主だった業務は、下記である。(1月3日～10日)

1. 派遣者の渡航準備 (AMDAの活動全般や注意事項を説明、ジャカルタ空港と滞在ホテル間の送迎、ジャカルタ⇄活動地バンダアチェの航空券手配と購入、医薬品や生活物資購入他)
- 1/6 日本人医師1名と調整員2名
- 1/7 AMDAカンボジア支部医師2名
- 1/9 台湾支部看護師1名、カナダ支部医師1名・看護師2名が出発。早朝6:20発の飛行機だったため、4:00ホテル



「ASEAN主催緊急首脳会議」会場で、地元新聞社に取材される筆者(右)



逢沢外務副大臣(左から6番目)をご案内する小林真理 AMDA ボランティア(右端)



医薬品を調達する AMSA 医学生



出発前、報道機関からのインタビューに答える諏原日出夫調整員

発! 3:00に起き、荷物を確認し笑顔で見送った。カナダチームのおほめの言葉は、“Perfect!”。台湾は「大丈夫です! (彼女は日本語と英語が堪能)」。カンボジアは“No problem!”。いたらぬことも多々あったろうに、お国柄や人柄がしのばれる励ましで、疲れも吹っ飛びうれしかった。

2. 本部と現地活動地との連絡調整、日本総領事館への報告

飛行機は12～15時間遅れに遅れ、電話が通じない。大幅に遅れているのか、事故や犯罪に巻き込まれたのか判断に窮する事態に何度も直面し、恐怖だった。

3. 「ASEAN主催緊急首脳会議(津波会議)」のプレス会場でPR活動

事前登録はしていなかったのに、セキュリティの厳しい会場になぜか入ることが出来た。日本だけでなく、BBCやAP、アルジャジーラなど外国の報道機関、高島肇久外務報道官はじめ外務省関係者にAMDAの活動を記載したりリリース(英語/日本語)を手渡しPRした。逆に地元の新聞社編集長から私たちAMDAチーム(カンボジア支部医師2名・台湾支部看護師・私)が取材を受けた。

ローカルイニシアティブ(現地主義)の大切さを実体験した

一般的な手術や治療が出来るよう適切に選ばれ品々を携帯したカンボジア人の医師たちは、15時間遅れの到着後活動地にある医薬品や医療消耗品をチェックし、直ちに診療に携わった。カルテなど印刷物を準備できないので、「はしかワクチンを接種した子どもにはマニキュアを塗る」。漏れ聞くエピソードに胸が熱くなった日々でもあった。

AMSA (Asian Medical Student's Association) インドネシア支部の医学生たち、ジャカルタ在住のAMDAボランティアの小林真理さんには大変お世話になった。インドネシア語が出来ない私だけで医薬品や物資を購入し、急なスケジュール変更に対応…ゾッとする。ローカルイニシアティブ(現地主義)の大切さを実体験した日々でもあった。

中長期の復興支援活動へ

これからは、保健医療支援及び心のケアを目的としたコミュニティセンターの建設運営、医療従事者の人材育成など復興支援プロジェクトの実現に全力で取り組みます。引き続き、皆さまのご支援をお願いいたします。

どっこい、ネパールの人たちはがんばっています

AMDA職員 中嶋 秀昭

ヒマラヤ山脈は変わらず美しくそびえたっているのに、その足元では人々が争っています。ネパールでは、国王とその息のかかった政府、野党、野党の一部であるが、政府に対する武力闘争を行っている毛沢東主義派反政府勢力(通称マオイスト)が三つどもえの争いを続けているのです。

1996年以来、各地で散発的に起こる政府とマオイストとの衝突により、これまで、1万人以上の人命が失われました。その大半は、政府軍・マオイスト双方の兵士なのですが、巻きぞえになった人々も多くいます。両者は停戦合意を行ったことがあるのですが、2003年8月にマオイストがこの合意を破りました。そして、今年1月まで両者の間で再合意までの努力が続けられていたのですが、結局、至らず、報道でご覧になった方も多いかと思います。2月1日、国王が内閣を解散、全権力を掌握して、「非常事態宣言」を発しました。それまで、国王は内閣にマオイストとの交渉を任せ、停戦合意を得た後、長年、行われていなかった総選挙の実現を実現しようとしていたのですが、状況の進展はまったく見られませんでした。そこで、国王はとうとう業を煮やしたということなのです。今後、3年以内の総選挙の実現を目指し、国の舵取りを行っていくということです。

私は3月28日に、ほぼ1年ぶりにネパール子ども病院のある西部・プトワールに到着しました。日本での報道により想像していたとは異なり、1年前と変わった様子は見られませんでした。ネパール子ども病院のスタッフも変わらず、元気に、精力的に、地元の女性たち、子どもたちのためにがんばっています。患者へのサービス、病院運営の向上のため、ネパール子ども病院では以下のようなことを行っていました。

1. 待合スペースを広げるため、受付カウンターを奥に移動。
2. 混雑の緩和のため、同じスペースに

あった産婦人科外来と小児外来のうち、小児外来を別の場所に移設。

3. 小児外科医を採用、中断していた小児外科手術の再開(ちなみに、ネパール国内で小児外科手術を行える病院はほとんどありません)。
4. 薬局にコンピューターを導入、売り上げ・在庫管理が容易になった。
5. 機材の在庫管理にもコンピューターを導入。
6. 駐車場を設置。患者や家族が病院に来やすくなり、駐車料金を徴収することで、病院運営の安定化のための



ネパール子ども病院での乳児健診(身長と体重の測定)



トレーニングを修了し、ユニフォームであるサリーを着た保健衛生啓発ボランティア達

収入確保につなげている。

以上は小さな変化かもしれませんが、ピーマール院長が変わらぬ熱意をもって、病院をもっとよくしていきたい、これにより、もっと患者のためになりたいと力説するのを見て、とてもうれしく思いました。

さて、これまでも何度かお伝えしてきましたが、ネパール子ども病院の周辺村落における重要な活動として、保健衛生啓発活動(PHASE: Primary

Health Advancement through Sustainable Empowerment)があります。この活動では、依然、多くの子どもの主要な死亡原因となっている下痢、肺炎などの疾病の予防を図ったり、妊婦にとって同様の異常出産、合併症などを防いだり、これらへの初歩的対処を行い、この対処が困難な場合はすぐにネパール子ども病院への搬送を行うため、女性たち・子どもたちへの啓発を行っています。具体的には、(1)地域の女性グループの中からボランティアを選出し、彼女たちに対して保健衛生に関するトレーニングを実施、終了後、彼女たちが他の女性たちに知識を伝えていく、(2)女性たちが保健衛生に関する知識を習得するのに困難をきたしているのには、その多くが字の読み書きができないということがある(ネパール全土における女性の非識字率は7割以上。村落ではさらに多くの割合の女性たちが字の読み書きができないと想定される)。この状況を打開するための識字教室、(3)母子保健に関する科学的根拠に基づいた教育を受けたことがない伝統助産婦に対してトレーニングを行い、地域の母子の健康を向上させる担い手となってもらう、(4)学校児童・生徒の何人かに保健衛生に関するトレーニングを実施、他の児童・生徒たちに伝えてもらう。(1)の学校児童・生徒版、という活動を行っています。

今回もいくつかの村落を訪問しました。ちょうど、上述(1)のボランティアへのトレーニングの修了式に立ち会い、ユニフォームとしてサリー(ネパール女性の伝統的衣装)を手渡しました。写真でご覧いただけるように、彼女たちの目は輝いています。自分たちは選ばれたんだ、ほかの女性たちのためにがんばるんだ、というプライドが感じられます。

また、識字教室でも、女性たちは目を輝かせていました。これまで文字が読めず、何もわからなかった状態から、ある参加者の言葉を借りれば、「目



識字教室（習った字を先生が朗読し、これを書き取る）



妊婦を訪問している伝統助産婦（右）



バンダへの協力を呼びかける
マオイストのピラ

が開いていく」ということです。文字の読み書きを当たり前に行っている私にとっては、いつこの教室を訪れても、新たな知識の習得はなんと嬉しいのだろうと感じさせられます。私たちが子どもの頃、字の読み書きができるようになりたいと思っていてもままたまならず、小学校に入って文字を覚え、いろいろなことが分かるようになっていった喜びに近いものなのでしょう。ただ、ネパールではこの「ままたまならない」状態が多くの人々の人生の長きにわたって継続していることが大きな問題です。他の参加者からは、「これまで字が読めなかったために、だまされてきた。これからはもうだまされない」「夫がインドに出稼ぎに行っているのだが、これまで夫からの手紙を読むのも、夫に手紙を出すのも、ほかの人に頼まなければならなかった。でも、これからは自分でできる」という声を聞きました。

そして、トレーニングを受けた伝統助産婦の女性たちもがんばっています。毎日、近所の妊婦を訪問し、日常の栄養、妊婦健診の受診、衛生環境の向上の大切さなどを説いています。そして、安全な出産介助を行い、異常時には即座に正しい判断を行って、妊婦をネパール子ども病院に搬送するので。まだまだ多くの人々が伝統的な考え方に縛られており、活動が困難なこともあります。助産婦たちは奮闘しています。

「ああ、ほんまにみんな、よおがんばってるなあ」（関西人なので関西弁です）・・・と思っていた矢先、ブトワールでは爆破事件が起きました。3月29日正午、街中の商店が爆破され、7人が負傷、うち3人が首都・カトマンズに搬送されました。もう1件、起こったという未確認情報もあります。いずれも、マオイストによるものと見られ

ています。イラクでの突然の自爆テロなどとは異なり、マオイストによる爆破は事前予告があるという良心的？なものなのですが、逃げ遅れた人々はときに甚大な被害を被ります。このような人々が、最初に述べた「巻きぞえになった人々」に含まれるのです…。

そして、マオイストはまた、たびたび住民にゼネスト（「バンダ」：政府への抗議を示し、政府との有利な交渉を図るため、住民に商店の閉鎖、救急車両を除くいっさいの車両の運行の禁止を呼びかけるものです。これに反した場合、焼き討ちに遭うことがあり、住民側も協力して自粛するケースが大半です）を呼びかけるのですが、4月3日からは10日間程度の予定のバンダが始まりました。村落を訪問した際、いたるところにマオイストが住民にこのバンダへの協力を呼びかけるピラを貼っていました。内容は、「今、この国は生みの苦しみにある。容易に新しい命を生み出すために、皆にバンダに協力してほしい」というものだということです。これに対し、政府は、マオイストとの連絡を絶つために村落の電話回線を遮断していると聞きました。急病患者、病院への搬送が必要な出産などに影響が出ています。政府とマオイストとの戦いを身近に感じました。

バンダは、PHASEの活動を計画通り実施するのを困難にしています。スタッフ自身の安全のため、バンダ中は村落に出かけられません。しかし、その間に計画の修正や練り直しを行って、活動をよりよいものに行っています。しかし、何よりも、人々の健康への影響（病院での診療が必要な人々が交通手段・連絡手段を断たれるために、それを受けられない）、また、たった1日のバンダによっても日銭を稼ぐことができなくなる多くの人々のことを思うにつけ、怒りと悲しみがこ

み上げてきます。それでも、人々はやさしく、突然、来訪した外国人である私を温かく迎えてくれました。彼らに私たちへの期待と感謝があるといえばそうでしょう。しかし、彼らを見て、困難な状況にありながらも、ある程度、これを仕方がないものと受け止め、日常の生を淡々と生きていこうという姿勢を感じるのです。教条的に「ネパールに新しい命を吹き込もう」と考えている人たちに、いったい、このような市井の人々への理解があるのでしょうか。

このような状況にありながらも、否、このような状況にあるからこそ、ネパール子ども病院はさらに尽力し、新たな試みを始めようとしています。病院における診療と、PHASEを通じた周辺村落における疾病予防・対処との連携強化を図るために、村落にコミュニティセンターを建設する予定です。これまでPHASEの活動を行い、要望がある村落を対象に、村落の人々、活動を行ってきたボランティア・助産婦などと協働して、センターを設立、さらに多くの人々のために、保健衛生啓発活動、識字教室、助産婦へのトレーニングなどを実施し、病院に行くお金がない人々のために出張診療を行い、また、このコミュニティセンターに人々が集まり、村の問題やその解決策を話し合ってもらいたいと考えています。当然、ネパール子ども病院も、さらに医療サービスを強化していきます。今後またたびたびバンダや、予期せぬ事態が起こるかもしれませんが、スタッフはやる気に満ちあふれています。そして、私たちは彼らをサポートし続けていきます。1人でも多くの人々の笑顔が見られるように・・・。
(2005年4月3日 カトマンズにて)

AMDA 『魂と医療のプログラム』：ASMP

2004年度AMDA『魂と医療のプログラム』：ASMP（アスンブ）は、フィリピン、ミャンマー、インドネシア、カンボジア、台湾の5カ国、8ヶ所で行われました。実施日、慰霊祭の場所、参加者は以下のとおり。



フィリピン

実施日	参加者名	実施場所	AMDA 担当者
11月27日	臨済宗 原田 浩文様 大屋 昌基様 カトリック 山頭 泰種様	フィリピン国立 パンパンガ農業大学	Dr. Zosimo Battad Dr. Promitavo Chua LUZNNET Dr. 菅波 茂 (代表)

ミャンマー

実施日	参加者名	実施場所	AMDA 担当者
12月13日	天理教 平野鉄之助様 岡部 嘉次様 小池 聡様 山下 司郎様	ニャンウー	鈴木俊介 山上正道 藤田真紀子
12月14日	同 上	パコック	同 上

インドネシア

実施日	参加者名	実施場所	AMDA 担当者
2月24日	天理教 平野 恭助様 関根 慶三様 渡辺日本国総領事	ワヒディン病院	Prof. Husni Tanra Ms. ANNE Dr. 菅波 由有

カンボジア

実施日	参加者名	実施場所	AMDA 担当者
2月25日	臨済宗 篠原 真祐様	オーダムキリバゴダ	Dr. Sieng Rithy 鈴木 俊介 潮田 裕美
	同 上	ベールトムバゴダ	同 上

台湾

実施日	参加者名	実施場所	AMDA 担当者
3月28日	最上稲荷教 中島 妙江様 大瀬戸泰康様 林 阿勇様 山名 真理様	潮音寺 (屏東縣)	Dr. Chao kai Chang Ms. Joyce Su Ms. Jamie Lai
	同 上	墾丁国立公園鵝鑾鼻	同 上

AMDA 『魂と医療のプログラム』

AMDA Soul and Medicine Program : ASMP (アスンブ)

AMDAでは緊急救援活動をとおして、かつて第二次世界大戦に巻き込まれた人々の心と現実に向き合ってきました。AMDAの名誉顧問であり、元フィリピン医師会会長である中国系フィリピン人のプリミティブ・チュア氏からAMDAの人権と平和の定義を機軸とした、AMDA『魂と医療のプログラム』が提唱され、2000年より開始しました。

AMDAの人権の定義とは、相手の存在を認めることです。具体的には「あなたを忘れていません。あなたを必要としています」です。

AMDAの平和の定義とは、「今日の家族の生活と明日の家族の希望が実現できる状況」です。家族の生活とは食べられて健康であること。希望とは子どもに教育をうけさせることです。この平和を阻害する要因として、戦争・災害・貧困があります。

AMDA『魂と医療のプログラム』は、戦没者の人権については魂の永遠性を専門とする宗教者による合同慰霊祭を、戦争に巻き込まれた人々の家族にはAMDAによる医療を通じた平和の追求を行おうとする、宗教者の方々と合同事業です。AMDAはこのプログラムを通じてアジア各国での平和構築に努めていきたいと考えています。

フィリピン慰霊祭報告

臨濟宗 原田 浩文

始めまして、岡山市 臨濟宗盛徳院住職 原田と申します。この度、2004年11月26日より28日まで菅波代表、静岡市 一溪寺副住職 大屋和尚と共にASMPフィリピン慰霊祭に行つて参りましたので簡単ではございますがご報告申し上げます。

まず菅波先生とは我が宗派での講演をご縁に始まり…もちろん以前よりAMDAの活動は知っておりましたが、まさか私のようなものが海外にて慰霊祭を行うとは思ってありませんでした。しかし、先生の熱い心に打たれ、また一年365日の内、たかが三日間、異国にて法要するのも良いではないかと思ひ、フィリピン慰霊祭に行く決心がついたのであります。もちろんフィリピンに行くのは初めてなので少々不安ではございましたが…。

26日、関西空港より10:00発、タイ航空にて4時間程でニノイアキノ・マニラ国際空港に到着しました。ターミナルに着くなり、何という蒸し暑さ…日本は冬を迎えようと寒くなってきておりましたので、体がついていきません。そんな中、入国手続きを済ませ駐車場にでましたところ、AMDAインターナショナル名誉顧問であり、元フィリピン医師会会長でもあるプリミティボ・チュア先生が出迎えに来てくださり、早速車に乗りホテルに向かいました。が、ものすごい車の多さ、すぐに渋滞に巻き込まれホテルにつくまでかなり時間がかかったような気がします。チュア先生に聞きますと、いつもの事です、これが普通ですよと言われました。ホテルに着き一息しているとフィリピン在住の山頭神父さんが来られ挨拶を交わしました。日暮れも

近かったので山頭神父さんの言われるまま世界で一番きれいだと言われているフィリピン港の夕日を見に海岸へ行きました。しかしこんなに静かで穏やかな海岸で戦争により何万という方が亡くなられたとは、到底思えませ

ん。哀しいことです…結局少々曇っていたので夕日は残念でした。そして市街を少し散策し、夕食を一緒にいただき、ホテルへ帰り一日目が終わりました。その間、菅波先生はマニラホテルにてフィリピン医師協会のホセリサル授賞式に出席されておられました。

27日、二日目 朝6時前に起き、朝食を済ませ、本日慰霊祭を行うパンパンガ州のパンパンガ農業大学に向けて車で移動しました。菅波先生は昨年9月にこの大学の人類学名誉博士号を授与されております。約2時間半程で到着しました。このパンパンガという所は第二次世界大戦中日本軍の神風特別特攻隊が最初に飛び立ったマバラカット東飛行場のあった所です。今でもその面影を残しています。世界初の人間爆弾により米艦隊に全員体当たりを果たし多大な損害を与えたと残されております。そこには神風平和記念廟がありますが神風特攻隊の栄光を称賛する為ではなく、その歴史的事実を通じて世界の人々に平和と友好の尊さを訴える為なのです。そして戦争によってこのような不幸な出来事を二度と繰り返さないと誓う祈念する場所でもあります。車を降りると大学総長バタッド氏をはじめ関係者、学生諸君達による歓迎の出迎えを受けました。少々休憩

し、最初にASMPフィリピン慰霊祭記念碑の除幕式を行い、場所を講堂に移し、セレモニーが始まりました。先ずは仏教での慰霊祭、衣に着替え袈裟を着け壇上に上がると、関係者・学生さんをはじめ参加者の方々が講堂を埋め尽くしておりました。これ程までに若い皆様にも関



心があることに改めて驚き、日本から来た見慣れぬ我々僧侶に拍手をいただき感無量でございました。香語・読経・そして戦争によりフィリピンに於いて戦死、病没、民間人犠牲者、すべての緒霊位に回向を行い終了。次に神父さんによるミサ・慰霊。続いて国家斉唱。ここで私はビックリしたのであります。日本の国歌を流していただき、なんと!“まさか”日の丸の国旗まで用意してくださっていたのです。この時始めてこの慰霊祭に来て本当に良かったと痛感致しました。そして、敵・味方なく戦争によって犠牲になった日本人・フィリピン人・アメリカ人…すべての緒霊位に慰霊・供養することができたことに感謝致します。チュア先生によるとこのように自国以外の慰霊をしてくれるのは日本の宗教家だけだそうです。大変喜んでおられました。その後セレモニーは続き、最後にAMDA本部より私達三人が持って行ったパソコンの授与式を終え閉会となり、そして昼食をみんなにいただき、マニラに向け出発しました。その夜はチュア先生の69歳の誕生パーティがあり出席させていただきました、ホテル帰着。長い二日目が終わりました。

28日、三日目 午前中、菅波先生とマニラ市内を少し観光した時のことです。市内には戦時中の捕虜収容所、独房、水牢など…生々しい、悲惨な建物の跡が未だにたくさん残されております。しかしそこで小学生ぐらいの女の子がかわいい笑顔で楽しそうに遊んでいたのです。何とも言えない光景でした。思わず「よかったね、戦争のない時代に生まれて…平和ですばらしい人生を送ってくださいね」と心の中でお祈り致しました。昼、最後のフィリピン料理を食べ、午後チュア先生に空港まで車で送っていただき、16:25発、タイ航空にて21:00関西空港到着、



無事帰国致しました。

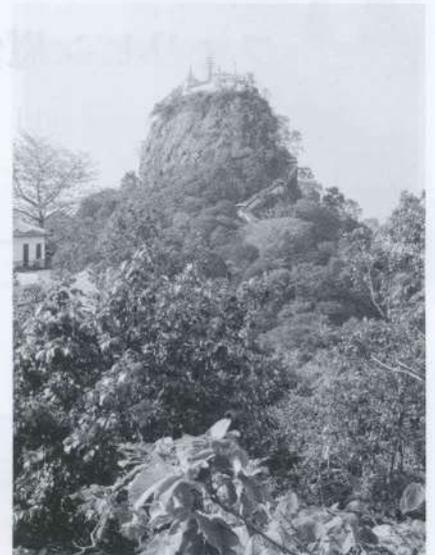
たった三日間のフィリピン慰霊祭でしたが、本当に充実した日々を送った気が致します。宗教者として慰霊・供養を行うことは務めでもあり、義務でもあります。そして現在、今生きている私達が『平和』な楽しい、一度しかない、すばらしい人生を送っていただくことが人間の努めなのです。その為にもASMPの活動が、AMDA本来の医療活動に少しでもお役に立つことを心より願っております。

またこのフィリピン慰霊祭に行くに

当たり、菅波先生をはじめASMP担当の難波 妙様、AMDA関係者の皆様には本当にご尽力いただき感謝申し上げます。また機会がありましたら声をかけていただければと思っております。

追伸 昨年起きました新潟県中越地震・スマトラ沖大地震・インド洋大津波による犠牲者、被災者の方々に謹んで哀悼の意を表し、お見舞い申し上げます。そしてAMDA関係者の懸命なる活躍に際し皆様方のご健勝を心より祈念申し上げます。

合掌



ミャンマー慰霊祭報告

天理教 小池 聡

ミャンマーでのAMDA「魂と医療のプログラム」(ASMP)活動として、2004年12月13日、14日に2ヶ所の寺院にて慰霊祭が執行されました。

ミャンマーへの天理教宗教師の派遣は2回目であります。平野、山下、岡部、小池の4名によってその祭儀が執行されたのであります。

まず、12月12日午後7時頃到着し、翌13日、早朝5時空路バガンに到着。祭儀服に着替えてThat Byin Nyu (タベニュー) 寺院に到着し準備にかけり慰霊祭は10時に執行されました。ミャンマー僧侶5名により読経が始まり約20分。引き続き私共天理教は神式でありますから、寺院中央の仏像の前に祭壇とお社を整え、ご供物を供えて天理教式にその祭事を執めたのであります。約30分、参集した村人は約250名。ミャンマー僧侶の場合、食事は1日2回で、しかも昼食は正午までに終了しなくてはならないとの決まりがありますので、午前中に行事を終了するにはなかなか大忙しであります。

昼食後は、参集した中の老人20名位が前列に出てビルマ当時の日本兵の様子を記憶を辿りながら話されたのでありますが、きわめて好意的であり、懐かしさを込めて語られました。引き続きAMDAスタッフによる保健衛生教育(応急処置の仕方)の実演があり、第一日目終了し、ニャンウーに移動したのであります。

12月14日、ニャンウーを早朝5時に出発。真暗い道中、車にてレパンチ

ェーポー(船乗り場)に到着し、エーヤワディー川を船にて約1時間半パコックに到着、ただちに着替えをしてカントー村に出発。寺院到着は9時でありますから、目的地に到着するまで4



時間かかるわけです。ASMP慰霊祭は10時半、僧侶との昼食会は正午までに終え、老人達と日本兵の思い出話を語られ、AMDAスタッフによる保健衛生教育また応急処置キットの配布が行われました。参集した村人は約350名。

12月15日はポッパ山寺院の見学、断崖絶壁の山頂によくぞ建立されたものと感動して帰りました。

同日ヤンゴン日本大使館表敬訪問。峯岸良夫領事と約40分程話した後、ミャンマー宗教省へ表敬訪問。佛教サミット閉会後の公務繁多の中にもかかわらず、ミャンマー宗教大臣が私達の為に駆けつけて下さり、約30分位

でしたか歓談された後、帰りには宗教サミットに使用された本とミャンマー織のジャンバックを土産に記念として下さり、「今後も活動を続けて下さい。又、なんでも申し出て下さい、協力します」とのお言葉を下さり、一同意を強くしたのであります。

以上、四日間の行程を恙無く終了することが出来たのであります。前回を通して感じた事は、各々の寺院内に他宗教を好意的に受け入れて、共に祭事を行う事であり。おそらく同じ目的を共有している者として寛大な人柄がにじみ出て居るところに、私共一同感服したのであります。又、ミャンマーの町、村を見てもその衣食住には必ずしも充分とは思われない、しかし話す言葉の柔らかさ、顔の和やかな姿は満足な心でしか生まれ得ないものと感じたのであります。「不自由を常と思えば不足なし」とはまさしくこの姿であります。

山上正道氏、藤田真紀子女史には大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。ミャンマー紀行といたします。



インドネシア慰霊祭報告

天理教 平野 恭助

昨年に引き続き今回もインドネシアのASMPに参加させて頂いた。昨年12月末、スマトラ島沖地震・大津波が起こりインドネシア国内だけで20万人を超える死者を出すという大惨事から2ヶ月足らずの時期だったこともあり、今回のASMPは戦争犠牲者に向けてというよりも地震・津波犠牲者のための慰霊祭の色が濃いものになった。

私たちが訪れたのはスマトラ島からはるか東方数千km離れたスラウェシ島のマカッサル(旧ウジュンパンダン)という所であった。津波の被害には無縁の地であったが、それでも同じインドネシア人の同胞意識からか、参列者たちの慰霊祭に捧げる祈りの真摯さは否が応でも伝わってきた。

ASMPの行われた会場は去年と同じマカッサル市内にあるワヒディン病院の3階ホール。参列者の顔ぶれもやはり若い学生中心であったが、人数は前回より多少多いような気がした。今回のASMPのご来賓である州副知事の到着を待っていたため慰霊祭は30分遅れで始まった。熱気あふれる中、六つの宗教が順番に祈りを捧げていく。カトリック、プロテスタント、イスラム、ヒンドゥー、仏教、そして我々天理教。「多様性の共存」という菅波代表の言葉を思い出させるごとく、魂の慰霊という一点に結ばれ互いの祈りに己を同化させあっている空気が伝わってくる。

儀式終了後、天理教岡山教区の義援金3,000ドルをAMDAインドネシア支部代表ドクター・タンラに手渡し、地震・津波救援活動に役立てて頂くことをお願いした。ドクター・タンラは昨年日本にて外務大臣賞を受賞したこともあって、心なしか所作にも威厳さえ感じられる。スピーチで時折飛ばすジョークにも磨きがかかってきたようで、聴衆を笑わせ会場を和ませる余裕を見せていた。

最後に、菅波代表のご子息・菅波由有氏が登場し、奨学金制度を開始する旨のアナウンスメントを英語でおこなった。能力はあるが経済的に恵まれないインドネシアの医学生を支援する奨学金は、聞けば、菅波茂代表、由有氏個人の所得の一部から捻出されるとのことだ。

これには父、菅波代表の「三人の子供たちにそれぞれ奨学金制度をやらせたい」との思いが根底にあると聞く。「物や金を取り入れることに主眼を置いた人生は先細りする。他者へ己の持てる物を出す、社会に還元するということがこれからのわが家の歩む道」とする父の考えをごく自然に受け入れ、それを実践するご子息たちの姿に感銘せざるを得なかった。かかる菅波代表率いるAMDAの目指すところは、窮極的には宗教的領分に入ってくるのではなからうか…。氏がよく言われる言葉に「新しい人間関係の創出」がある。人との出会い、人間関係というものは我々互いの前生からの因縁に因るとされるが、今生においても、例えば我々が救援・相互扶助・共存・共鳴・祈り・自己犠牲・慰霊等々の行為を繰り返して



いく過程の中で、互いの徳分に見合うかたちでもたらされるものではないかと思う。

これまでASMPに関わることで良き人々との出会いがあった。今回も六つの宗教の僧侶・神父・牧師・教師が肩をならべて写真を撮った瞬間は、これ以上ない満足感に満たされたひとときであった。今後日本とアジア諸国のみならず世界中に新たな良き人間関係が築かれていくことを願いつつ、今後のASMPの拡がりを夢見て行きたいと思う。



カンボジア慰霊祭報告

臨濟宗 篠原 真祐

去る2005年2月25日、カンボジアにてASMP慰霊祭を開催しましたので報告致します。出発は2月23日、帰国は同月28日です。カンボジア渡航は初めてのことでした。今回も一人旅、2つの展覧会の合間を縫って行ってきました。(展覧会とは、小生、写真を足掛かりとした文化活動を展開しておりまして、一つは小学校閉校の記念事業「等身大写真インスタレーション展」、もう一つは「アートリンク・プロジェクト」という、障害者と作家が1対1で半年かけて共同制作を行う企画の展覧会です)寝不足が続いていたので移動時間がとても良い休養となりました。

夕方、プノンペン空港に到着するとAMDAカンボジアのドクター、シェン・リティ支部長と潮田裕美調整員が出迎えて下さいました。潮田女史は若くて小柄な方でAMDAカンボジアのコンボン・スプー州にあるオフィスに勤務されているそうなのですが、なんとその地域に住む唯一の外国人らしく、もう2年も尽力されているそうで頭の下がる思いでした。滞在中は、観光案内や買い物にまでお付き合い下さり、何から何までお世話になりました。

さて、プノンペンのホテルに到着、明日の打ち合わせを簡単に済ませて夕食、就寝。

24日は9:30より慰霊祭のあるコンボン・スプーの現地へ出発、西へ車を走らせること約2時間で到着しました。慰霊祭は2カ所で行います。オードムキリパゴダとヴェールトム村です。オ

ードムキリパゴダはAMDAが運営支援をおこなう小学校とデイ・ケア・センターと同じ敷地内にあります。その小学校の校庭で慰霊祭を行うこととなりました。また、ヴェールトム村には地雷等の影響で障害を持つ方々の施設があり、そこで慰霊祭を開催する予定でしたが急遽村の寺院に変更となりました。打ち合わせを終え、AMDAコンボン・スプー・オフィスに寄ってからプノンペンに戻り、遅い昼食をいただきました。

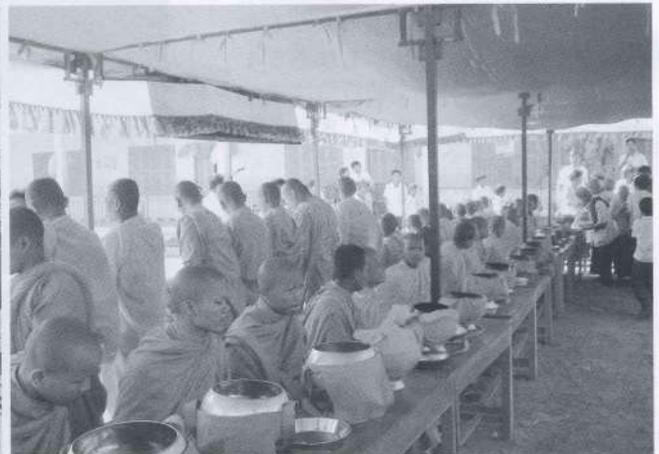
その後、少し時間が余りましたので、トゥール・スレン博物館に案内してもらいました。トゥール・スレンの建物は元高校の校舎なのですが、ポルポト政権当時Security Office 21と呼ばれた刑務所となり、約2万人が収監され、生存者は僅か6名という、正に地獄となった地です。狭く暗い独房、赤ん坊から老人に至る番号札をぶら下げた収容者の顔写真、本物の髑髏、数々の拷問器具。鉄のベッドがボツンと置かれた尋問室に立ってみる。超現実的な空間の、格子模様の床にのびる窓から差し込んだ日溜まりの、あまりの美しさに愕然とする。罪無き囚人たちの悲鳴と心情を想い、思わず手を合わせた。アンコールワットよりも何よりも、最も印象的な場所でした。ポルポト時代をはじめとした悲劇の時代を書籍で読んでいたのですが、その爪痕を目前にして、言葉を失い胸が痛みました。

平和的な日本の人々が日々思い悩ん



でいる、様々な事象の大半は、とてもちっぽけなことなんだと気づかせてくれます。

2月25日、快晴。5:45にホテルを出発。途中朝食を取り、7:30にAMDAコンボン・スプーに到着。下準備のあとすぐにオードムキリパゴダへと向かいました。予定通り8:00に到着、子供たちが手をつないで列を成して迎えてくれました。数百人が参加の下、慰霊祭は《ウェルカム・スピーチ～菅波代表のメッセージ代読(小生読、通訳:リティ先生)～パゴダ代表僧挨拶～ガバナー挨拶～カンボジア僧への布施～カンボジア僧による慰霊～日本人僧(小生)による慰霊法要～土産、寄付金授与～閉会后、首座(しゅそ、代表僧)との食事会》と言った内容で進められました。菅波先生からのメッセージの後は大きな拍手が起こりました。AMDAがいかに人々に受け入れられ、喜ばれ、期待されているかを推し量るものでした。私の慰霊法要は、有難そうな顔と物珍しそうな顔の民衆が入り交じった感じで、菅波先生のメッセージほどは盛り上がりませんでした。感慨深げではありませんでした。食事会は村人たちの手料理が並んでいました。旅行ガイドブックなどにある『食中毒に注意するように』との一文が一瞬脳裏に



浮かびましたが、村人たちは自分の料理が食べてもらえるのをじっと待っていますので(僧侶に食べてもらおうと極楽に行けるとの信仰があるのです)まんべんなくいただきました。味の方は、とってもおいしかった!しかも肉あり魚ありのご馳走でした。私の修行時代とは大違い、朝はお粥に梅干し、昼夜は麦飯にみそ汁に漬け物のみでしたから。もちろん食中りにはなりません。11:15にオーダムキリパゴダを後にし、一旦AMDAコンボンスプー・オフィスに戻って休憩しました。

14:15ヴェールトム村へ。オーダムキリパゴダより更に奥に入ったかなり田舎の美しい処です。始めはちらほら

だった民衆が、次々と集まってきて、予定をはるかに超える(200人近いでしょうか)慰霊祭となりました。参加者をよく見ると、義足の方が沢山おられます。痛々しく見えるのですが皆とても明るくて、逆にこちらが勇気を貰うようでした。午前とほぼ同じプログラムで慰霊祭は進められ、円成。

翌26日は悲願の地、アンコール遺跡群のあるシェムリアップに行ってきました。そして28日朝に無事帰国。

今回の慰霊祭の後、PTAやコミュニティの結束力が随分と高まったとお聞きしました。和合専一、何よりのことです。カンボジアの人々はとても親切で、明るくて穏やかです。けれどもそ

の心底にはボルボト派による大虐殺や幾多にも及ぶ苦悩が隠されているようです。旧日本軍の関与は少ない国ですが、カンボジア人にとって今回のような慰霊祭は大変に意義のあることだと実感しました。AMDAの活動は正に「慈悲行」でありましょう。今後とも力及ばずながらその一端を担うことが出来ますことを祈念しています。

最後に、ご縁をいただきました菅波代表、当地にてお世話になりましたリティ先生、潮田氏、AMDAスタッフと関係者の皆様、に、拝謝して、小生の報告を終わります。

台湾高雄 バッシー海峡・南シナ海周辺にて 死没する精霊への法要記録

最上稲荷教 大瀬戸 泰康

3月23日

13:30 発中国東方航空528便にて上海に向けて中島妙江上人と山名真理さんが出発。

3月25日

09:40 上海・香港を経由し、17:49 台湾・高雄へ到着。車にてホテルへ。
20:25 台湾の林阿勇(りんあゆう)さんと合流し、うち合わせ。

3月26日

午前0時 大瀬戸泰康
台湾・高雄へ到着

3月27日

15:00 法要準備開始、まず高雄市内にて供物の買い出しを行う。現地のお供えのスタイルを聞いてみると、果物を4種類用意して、大きいもの1つを2カ所、小さいものを4つ位を2カ所お供えするそうだ。実際に現地の寺院に入って見ると、そのようにお祀りしてあった。写真を参考にして買い出しに向かう。

果物はドリアン1個、オレンジ5個、鳳梨釈迦5個、韓国産梨5個に決定。

お酒は紹興酒を2本。これが一番の供養だとのことであった。

お菓子は日本から吉備団子と大手まんじゅうを持参した。

16:10 花屋にて組み花を1組作ってもらい、準備完了。

3月28日

08:50 ホテル発、当初の予定は9時30分発だったが、余裕を見て9時とし

音寺へ向かう。入り口はなんと道路沿いの椰子の林に看板だけ出ていた。その横に車1台がやっとの細い道が続いている。これは知っている人でなければ分からない。

12:15 潮音寺着。二階が本堂だということで、二階に上がって準備開始。部屋の中でもやはり暑い。準備中汗が噴き出す。この間に林さんとAMDA台湾のジョイスさんには、この法要の趣旨を地元の僧侶に伝えるために日本語の原稿を中国語に訳してもらった。

13:00 潮音寺の責任者の方が挨拶にこられる。

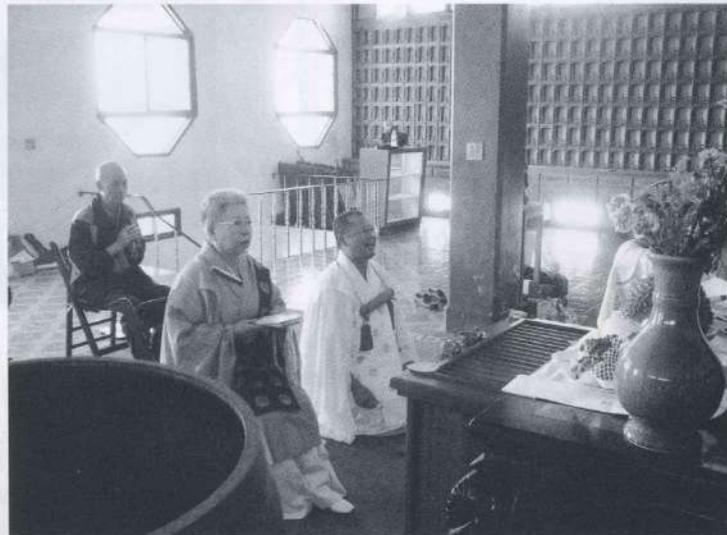
13:05 地元の尼僧が到着。式典は先ず地元の僧によって法要が営まれ、その後我々が法要を行う。

13:12 尼僧による法要開始。

13:40 尼僧は先に帰るといふことで、先に記

念写真を撮影する。此処まで来るのに5時間かかるそうだ。記念品を手渡して、このASMPの趣旨を説明してお別れ。趣旨に非常に喜んでもらった。時間があれば同席して頂きたかった。

13:50 我々の法要開始。散華にて



た。道中は南国らしく椰子の林を幾度も通る。途中軍の落下傘部隊訓練に遭遇したり、地元の道教のお祭りに遭遇したりしながら、正午頃に現地近くのコンビニに到着。そこで休憩を兼ねて車内で短い昼食を取り、法要場所の潮



道場を荘厳ならしめた後に読経。修法に続き、導師中島妙江上人により奉告文奏上し塔婆に焼香を捧げる。「茲に清浄の大衆慎んで三宝聖衆の御前にてAMDA主催の世界供養会を本日此処に厳修、恭しく施餓鬼の法会を開く。総じて四聖六道法界万霊、別しては日清戦争・日露戦争・大東亜戦争をはじめとし、日本が行った戦争行為に於いて犠牲となる戦死病没公務殉難の諸精霊、特に当地、台湾パシー海峡、南シナ海近海における戦死病没公務殉難の諸精霊、更には当地周辺に眠る戦死病没公務殉難の諸精霊に回向する。願くは三世十方隨機応縁の三宝、普賢難思の冥衆よ各降赴して証成し給え。

今朝以来香華燈明を供養し、香飯浄水を厳備して、異口同音に誦誦する大乘妙法蓮華經。唱え奉る妙法蓮華經。この功德によって、普ねく真如實際に運らして等しく十方の衆生に施して、仏祖の冥加を請い、決定不慮の利益を祈る。

故らに祝す。一念三千の香の煙は十方法界の依正に薫じ、顕本遠寿の法の花は三界六道の迷衢に散じ、平等大慧の燈の光は九界生死の闇を照し、色香美味の香飯は一切餓鬼界の飢渴を除き、甘露清涼の浄水は煩惱業障の焰を滅し、極唱の妙音は二十五有の含靈識に徹し、読経の梵音は速かに即身成仏の大果を成ぜん。



伏て祈らくはこの最勝修多羅如法の福会、その功德無辺にして十方法界に遍ねく、信誘彼此怨親順逆、有縁無縁一切の精霊、永く九法界の繫縛を脱し、清浄自在の大果報身を成就することを得んことを。」

題目の中、林さん、AMDA台湾のジョイスさん、山名さんと焼香が続く。団扇太鼓も加わり、皆で一心に霊位の冥福を祈る。

15:24 潮音寺の法要終了し、塔婆を海へ流しに移動。海の近くに適当な場所が見あたらないので、海の近くの川から塔婆の水向けを行い海へ流す。15:32 すべての法要を終了し、片づけて帰路へつく。

2004年度 ASMP によせて

AMDA代表 菅波 茂

2004年度もフィリピン、ミャンマー、インドネシア、カンボジア、台湾でAMDA「魂と医療のプログラム」：ASMP（アスンプ）慰霊祭を開催できましたことを深く感謝いたします。このASMP慰霊祭は今年で5回目を迎え、その参加者は2000名を超えました。ご尽力をいただきました関係者の皆様から御礼を申し上げます。

AMDAは1984年の設立以来これまで、アジア各地で緊急人道援助ならびに貧困対策など数多くのプロジェクトを展開してきました。20年にわたる活動の中で、「第二次世界大戦」が各地に残っている現実を目の当たりにしてきました。戦争で亡く

なった人たちの霊を敵味方無く慰霊し、残された人たちの平和のために医療を提供するASMP（アスンプ）は、日本から自費で参加して下さった宗教者の方にとりまして意義深いものとなったとのお言葉を頂いております。2004年6月29日には、ASMP慰霊祭に関わった宗教者の方々、一般の方々にお集まりいただき、岡山で「ASMP International Conference 2004」を開催いたしました。平和の尊さ、有り難さを訴えるASMPの礎石となる会議になったと確信しています。私たち世代が過去の悲しい歴史から学んだ教訓を平和の礎として示し、平和への誓いを新たにしたいと



心から願っています。

「平和」を語る上で大切なことは、戦争、貧困、災害で亡くなられた方々の関係者を含む全ての人々が平和な生活を送るために健康である事です。その健康を支援していくのが私たちAMDAの使命です。今日の家族の生活と明日への希望が実現できる平和な世界をめざして、AMDAは、保健医療、人材育成、生活環境向上等の支援活動を続けてまいります。

AMDA 関係 刊行物のご案内

- ・お問い合わせは、AMDA 本部事務局まで。
TEL 086-284-7730 FAX 086-284-8959
- ・お申し込みは、郵送か FAX でお願いします。
- ・お支払いは、郵便振替でお願いします。送料別。
口座 AMDA 出版 口座番号 01220-6-12076

■ AMDA の提言

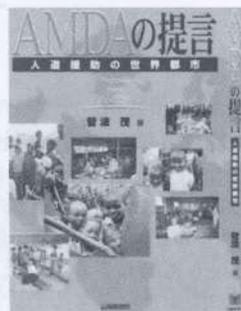
一人道援助の世界都市

岡山から世界に飛び出し、国際的な医療 NGO として知られる AMDA。その代表の著者が問いかけ、提案する。「日本は経済大国から、人道援助大国をめざせ。岡山に世界へ向けての人道援助ネットワークの拠点を築こう」と。

256 頁

ISBN4-88197-607-9 C0036 P1600E

- ・菅波 茂著
- ・出版元 山陽新聞社
- ・1996 年 11 月 25 日発行



定価 1,680 円

■ AMDA 緊急救援 出動せよ!

— 緊急救援 10 年の軌跡 —

国境を越えた緊急医療活動で世界的に知られるまでになった国連 NGO・AMDA。10 年間に 15 回以上の緊急救援活動に参加した三宅和久医師が、現場で直面し、感じた人道援助の実際。1 冊購入につき 100 円が AMDA に寄付されます。235 頁

ISBN4-86069-027-3 C0095

- ・三宅和久 著
- ・出版元 吉備人出版
- ・2003 年 2 月 14 日発行



定価 1,470 円

■ 医療和平

— 多国籍医師団アムダの人道支援 —

21 世紀を生きる子ども達の命を救いたい! AMDA は北部同盟とタリバンの保健担当者を岡山に招聘。AMDA のアフガニスタン国内医療和平構想に両者は快諾し協力を約束してくれたが…救える命があればどこへでも行く AMDA の緊急救援活動と危機管理。225 頁

ISBN4-08-78 1262-6 P1500E

- ・菅波 茂 著
- ・出版元 集英社
- ・2002 年 5 月 2 日発行



定価 1,575 円

■ 遥なる夢

— 国際医療貢献と
地域おこし —

AMDA 設立までの経過と活動記録。AMDA に関わった人々について紹介すると共に AMDA の展望と日本の NGO 活動への提言。

316 頁

- ・菅波 茂 著
- ・出版元 AMDA
- ・1993 年 9 月 20 日発行



定価 500 円

■ ルワンダからの証言

— 難民救援医療活動レポート —

援助大国とはいえ、国際的な NGO に比べると組織は小さく財政的にも弱い日本の NGO が、劣悪な環境の中でルワンダ難民のために活動した記録。

200 頁

ISBN 4-521-00541 C0030 P2000E

- ・AMDA 著
- ・出版元 中山書店
- ・1995 年 4 月 3 日発行



定価 2,100 円

■ はばたけ! NGO・NPO

— 世界の笑顔にあいたくて —

自然災害・難民救済・環境破壊・高齢者福祉など様々なボランティア活動は国内だけでなく国際的な広がりが見られます。広島県と共同開催の第一回 NGO カレッジの講義録で、国際ボランティアを志す人に必携の書。328 頁

ISBN4-88517-263-2 C1030 P1800E

- ・ひろしま国際センター編
- ・出版元 中国新聞社
- ・1998 年 3 月 25 日発行



定価 1,890 円

■ とびだせ! AMDA

— AMDA・アジア医師
連絡協議会の活動 —

第 1 部 阪神大震災における AMDA 医療ボランティアの動き。緊急救援活動における後方支援体制。防災への提言。

第 2 部 国際緊急救援での活動記録。バングラデシュ、ネパール、カンボジアやルワンダ、ソマリアなどの紛争地区での難民救援活動の記録。270 頁

ISBN 4-905690 21-8 P1800E

- ・菅波 茂 著
- ・出版元 厚生科学研究所
- ・1995 年 7 月 15 日発行



定価 1,890 円

20年ぶりの祖国へ

—アフガン難民の声—

AMDA クェッタ事務所 齊藤 真美子 (調整員)

AMDAは2001年10月の空爆開始直後より難民支援活動を開始。同年12月からは主にパキスタン・クェッタ近郊の難民キャンプでの医療保健面での支援を、UNHCRなど関係機関との連携により開始しました。仮設診療所での診療のみならず、難民が自ら健康を保ち、帰還に備えることができるよう衛生教室など保健支援も実施してきました。2004年9月より帰還政策の推進により、多くのキャンプが閉鎖となりました。このため、キャンプでの保健医療支援を完了する一方、難民の帰還を支援する自主帰還センター (VRC) での診療や衛生教室を開始しています。

自主帰還センターやクェッタの町なかで集めた難民のこぼれをご紹介します。

(1) 二十年ぶりの故郷：

ムハマド・ナビ (50歳男性)

50歳になるムハマド・ナビは、故郷のアフガニスタン東部パクティカ州へ帰るため、UNHCRの自主帰還センターで登録の順番を待っていた。母親、妻と3人の息子、3歳になる一人娘の7人家族である。彼にパキスタンにきた経緯を聞いてみた。「20年以上前ソ連がアフガニスタンにやってきて、母親と家族と逃げてきた。パキスタンに辿り着くのに数日かかったよ。ソ連軍の空爆を避けるために、夜に移動した」

パキスタンでの生活はどのようなものだったか。「グリディ・ジャングル難民キャンプ (旧難民キャンプ) で暮らしていたが、生活は厳しかった。私は手に障害があってね、日雇いの労働等もなかなか見つからなかった。せいぜいゴミを集めて、30～50ルピー (60円～100円) くらい稼いだ。子供たちは勉強なんてしたことは無い。私を助けて働いてくれた」

なぜ帰ることを決心したのか。「平和が戻ってきたので、国で働き生活することができるだろう。故郷の村に戻るさ。わしらはただ、国に平和がほしいだけだ。アフガン人は自国のために働いてほしい。他の国のように、普通に安心して暮らせるように」

(2) 初めての祖国：

ブルフラ (14歳少女)

クェッタで生まれ育った14歳の少女ブルフラは、市内の学校に9学年生 (中学2年相当) として通っていた。両親と弟2人、妹1人の6人家族で、自

主帰還センターでアフガニスタンに帰るための手続きを待っていた。

「21年前、両親がパキスタンへやって来たの。ソ連との戦争があったから。私はその後、ここで生まれたわ」

帰還することをどう思うか？

「私にとってアフガニスタンは初めての国だから、不安が大きい。ちょうど9学年の期末試験を終えたばかりなのよ。アフガニスタンでは勉強が続けられるか、分からないのに。父さん達は帰るのを喜んでいるけれど、私は乗り気ではないな。勉強が続けたい」

パキスタンでの生活はどうだったか。「生活環境はまあ良かったけれど、でも、パキスタンでは結局2級市民としてしか扱われなかった」

日本の人達に伝えたいことは何か？「カラシニコフや人を殺す道具を無くしてほしい。その代わりに、アフガニスタンに教育という花を植えてほしい」

このように帰還する人々の胸には不安と希望が交錯してアフガン難民の中には、自らパキスタンに留まろうとする者もいる。

「小さな頃、カンダハールから逃れてきた。アフガニスタンには帰らないさ。25年来、生活の基盤は全てここ (パキスタン) にあるのだから。今更どう帰れというのか」パキスタンで教育を受け医師になった青年が、帰還政策について吐露した言葉である。

更に、パキスタンで生まれ育った青年の中には、アフガニスタンとの繋がりを否定しようとする者もいる。「祖父はアフガニスタン出身だけれど、俺に関係は無いね。あっちに親戚もいな



自主帰還センター (VRC)・UNHCRの主導のもと帰還先までの過程を支援する

いし。アフガン人は戦争好きで、世界一腐敗している。全くしょうがない奴らさ」

一方、ある女子学生は次のように祖国への思いを述べている。

「叔父さん家族は難民としてニュージーランドに渡ったの。パキスタンはアフガニスタンよりいいけれど、もっとお金のある国のほうが良い暮らしができるもの。でもね、「白人の言うことにYesと従わなければならない」って。私は、自分の国に帰りたい」

彼女にとって、パキスタンは必ずしも安寧を得られる土地ではなかった。また、偏見に対して昂然と憤りをあらわす難民もいる。

「自分の故郷で、何で俺がパシュトゥン人というだけでタリバーンと後ろ指をさされなきゃならないんだ」彼の怒りは、他の多くの人々も感じている。その個人の考えや内面の如何にかかわらず、人種、言語、宗教などの表面的違いにより、その人間の価値が判断されてしまう。これは、近年、世界の多くの地域において「中近東出身者」「イスラム教徒」などが異質なものと捉えられ、偏見にさらされていることに共通する。

AMDAはこれまで、緊急に保護を必要としたアフガニスタン攻撃以降の難民支援を実施してきた。しかし、難民の帰還、或いは隣国に留まる如何に関わらず、難民とその周辺地域住民との融和が不可欠なテーマとして認識されつつある。自分たちとは異なる集団に対し、抱く偏見は世界の至るところで存在する。今後は、両者の複雑な思いを汲み取りながら、彼らの間に存在する不信感を少しでも軽減できるよう、難民と地域住民双方に裨益する事業に取り組んでゆきたい。

神奈川県海外技術研修員修了式

AMDA 神奈川支部副代表 松本 哲雄

予算の半分を占める国からの補助金はなくなりましたが、神奈川県では多少規模を縮小しても研修を今までどおり続けることになりました。そのため県の通知が遅くなり、小林代表が7月急遽バンコクに飛んで人選し、審査締め切りに合わせると言う慌しい日程を消化しました。

2005年3月17日、AMDA 神奈川として4回目の受入となる海外技術研修員修了式が神奈川県庁新庁舎で挙行されました。5階の小会議室では大きなテーブルに主催者側スタッフ、向かい側に研修員、その後ろに受け入れ機関・NGO等の職員が並びました。

研修員はカンボジア2名、中国、モンゴル、タイ、ルワンダ、ウズベキスタン、メキシコ各1名の計8名（男女各4名）。

松沢知事の祝辞に続き、修了証と『神奈川県地球市民メッセージ』の委嘱状、記念品として箱根細工が授与されました。さらに神奈川県以外の受け入れ機関に感謝状が贈られ、最後に代表して中国の研修員が謝辞を述べました。

歓談で知事が話題を提供し、カンボジアでは知事が当時県議団の一員として、学校建設のため百万円をプノンバケンに提供し、モンゴルでは朝青龍。ルワンダでは地雷の被害（研修員の側にいた留学生は地雷で右足を失い、義足・クラッチを使用）。ウズベキスタンでは、アラル海が干上がって船が砂上に置き去りになった原因等に及びました。

今回、AMDA 神奈川支部が推薦したタイ人Tawatchai LIMSATABODEE、愛称リムさんは医師として初めてバンコク総合病院から派遣されて来ましたが、日本語はある程度独学で習得していました。

研修テーマは『ガンの早期発見技術』でしたが、コミュニケーションは日・英・タイ語のチャンポン（と言ってもタイ語の分かる病院職員はいなか

った）。リム医師は「日本語の（医学用）漢字は難しい」。そこで余暇は漢字の勉強に時間を割き、宿舎になった神奈川県国際研修センターのお別れ会では「帰国しても日本語の勉強を続けたい」と言いました。

受け入れ機関の済生会神奈川県病院総務課主任がエピソードを披露。「あなたの専攻は？」と質問すると、リム



修了式で
左から筆者・リム医師・松沢知事



よこはま動物園ズーラシア
左から 筆者・リム医師

医師は「コウクウ内科」。そこで主任は『口腔外科はうちにもあるが、口腔内科は・・・』と思って尋ね直すと、改めて「航空内科」と言ったそうです。つまりリム医師の前任地はバンコクのドン・ムアン空港を民間と共用する空軍の病院でした。

研修期間は昨年より3カ月短縮し、9月から3カ月間日本語研修、実務研修は4カ月間でしたが、リム医師以外の国籍〔性別／本国勤務先／研修種目／受け入れ機関／推薦機関〕は次のとおりです。

カンボジア〔男性／自発的カウンセリング検査センター／HIV検査技術／横浜市衛生研究所／カンボジア保健省〕、同〔男性／上智大学アンコール遺跡国際調査団／遺跡調査・修復技術・図面作成技術／（株）横河設計工房・上智大学アジア人材養成センター／同左〕、中国〔女性／瀋陽市朝鮮第一中学校／日本語教授法等／県立川崎高校／遼寧省外事弁公室〕、モンゴル〔女性／モンゴル国立衛生研究所／ウイルス検査技術／県衛生研究所／モンゴル国立衛生研究所〕、ルワンダ〔男性／ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト／義肢装具製作技術／（株）平井義肢製作所／ム・プロジェクト〕、ウズベキスタン〔女性／ウズベキスタン免疫学研究所／ウイルス検査技術／県衛生研究所／ウズベキスタン免疫学研究所〕、メキシコ〔女性／インテラパス（給排水のための首都圏・地方自治体連合公社）／水道水の水質検査及び水質管理技術／県企業庁水道局水質センター／JICA帰国専門家連絡会かながわ〕。

中国人の日本語教師に「高校の授業で一番の収穫は？」と尋ねると、彼女はしばらく考えて「たくさんあるが、日本文学の指導法が参考になった」。在中国朝鮮族の間でも日本語の人気は高いそうです。

研修センターへ戻る途中、ファミリーレストランに入りました。そこでオムライスと苺サンデーを食べましたが、それを見ていた隣席の女性がグスクス笑い、そこでリム医師「タイ料理は日本料理よりもっと甘い、もっと辛い」。私達は大の甘党？でした。

帰国前日の20日、よこはま動物園ズーラシアの帰路ドラッグストアをハシゴして、家族の土産に兎マークのチューブ歯磨きを買いましたが、昨年未の津波で被害に遭った親類・知人がいなかったのは不幸中の幸いでした。

AMDA カンボジアスタディツアー

2005年3月7日から14日までの8日間、AMDA カンボジアプロジェクトにスタディツアー参加者7名が訪問して下さいました。参加者の方々から、スタディツアーの感想を伺いました。

<スタディツアー日程>

- 1日目：各空港から現地へ空路移動
- 2日目：アンコール遺跡見学
- 3日目：シェムリアップ市内見学
- 4日目：コンボンスプーコミュニティ開発プロジェクトにて巡回診療と保健教育を視察
参加者による保健教育企画グループワーク
- 5日目：コンボンスプーコミュニティ開発プロジェクトにて保健教育を実践
村の保健ボランティアさんの活動視察
日本カンボジア友好小学校運営支援プロジェクト視察
- 6日目：AMDA カンボジアクリニック (ACC) 視察
プノンペン市内見学
- 7日目：帰国

—まず、今回このカンボジアスタディツアーに参加したきっかけを教えてください。

- A：以前、姉がこのツアーに参加して「楽しかった」と言っていたこと、また元々NGOの活動に興味があったので参加しました。
- B：僕は、去年ごろからNGOの活動に興味を持ち始め、実際にボランティア活動を他のNGOで始めました。それをきっかけに、もっと近くでNGOの活動を見たいと思ったからです。
- C：私も国際協力活動に関心を持っていました。将来、そのような活動に参加したいと思っていて、以前からスタディツアーに参加したいと思っていたのです。今回のスタディツアーには、クリニックの見学があるし、カンボジアは最も興味がある国なので、参加を決めました。
- D：私も将来、国際保健・医療に関係のある仕事をしてみたいと思っているので、このツアーに参加しました。
- E：私はカンボジアの保健状況や問題点を実際に目にして今後の自分の勉強に活かしたいと思って参加しました。
- F：以前から海外での活動に興味を持っていましたが、前回のベトナムスタディツアーに参加した友達の経験談を聞いたことが決め手となって、参加を決めました。
- G：私もスタディツアーに参加したことのある友達の話を聞いて参加を決めました。

—NGOの活動に興味を持っている人が多いようですが、スタディツアーに参加する前は、NGOの活動にどんな感想・イメージを持っていたのですか？

- A：「NGOで働いている人＝日焼けしている」というイメージ。
- B：僕は何故か、「NGO＝常に財政難」というイメージを持っていましたね。
- C：私は、災害救援時などの活動では、現場が混乱するといった話を聞いたことがありました。
- D：正直なところ、まだNGOの活動を良くわかっていなかったの、漠然と「草の根協力」というイメージを持っていました。
- F：現地の活動で、技術や知識を与えるだけではなく、現地の人々が自分達で出来ることは自分達で出来るよう活動しているNGOの影響力はすごい！と思っています。
- F：「開発途上国が発展するために援助する素晴らしい活動」というイメージ。
- G：「NGO＝教育や保健衛生などの分野で人々の自立を目指しながら支援している団体」という漠然としたイメージでした。

—みなさん、NGOについて、またその活動について色々な感想・イメージをお持ちだったんですね。ところで、スタディツアーに参加する前に何か不安はありましたか？

- A：体調管理ですね。
- B：寝坊して他の参加者に迷惑をかけるとか、パスポートをなくしてしまうとか…。
- C：私は特になかったです。
- E：クメール語も英語も会話能力がないので、コミュニケーションが上手くとれるか不安でした。
- F：何か変な病気にかからないか心配していました。
- G：私は、海外旅行が初めてだったので、出発前はちょっと緊張しました。

—実際に参加してみて、どんなことが印象に残りましたか？

- A：アンコール遺跡で、象に乗っていたとき、象が暴れそうになったこと（笑）。驚きました。
- B：ツアー全体を通じ、都市部から郊外の村まで、色々な角度からカンボジアをという国を見ることが出来ました。その中でも、現地スタッフと一緒にAMDA事務所で一泊した事が最高でした。
- G：確かに、村と首都の人々との生活との違いは印象に残りました。もちろんアンコール遺跡には感動しましたね。

—AMDAの活動を視察した感想はどうですか？

- A：村の保健ボランティアの人々、日本から派遣されているAMDAスタッフ、現地のAMDAスタッフの人間関係が非常に良かったことが印象的でした。
- C：私もプロジェクトに取り組む現地スタッフと保健ボランティアさんの姿勢が印象的でした。「村を良くしよう！」という懸命な思いが伝わってきました。私も

将来、現地の方々と一緒に活動したいですね。

G: 私は、専門の知識を持った現地のAMDAスタッフだけが、保健教育を行うのだと思っていました。だから、村の人が保健ボランティアになり、知識を身につけた村人に伝えるということに驚きました。でも村の人は今日、食べて生活していかなくちゃいけない。そんな状況の中で「保健」というものが、村の人にとって後回しになっているように感じました。もっと村の人にとって「保健」が身近なものになるようにするにはどうしたらいいのか疑問が残りました。

A: 僕も同じような印象を持ちました。例えば手洗いや煮沸した水を飲むことの重要性を村人に伝えるだけではなく、それを実際に行動に移してもらうことはとても困難だとか…。

—スタディツアー期間中、みなさんが実際に保健教育活動を企画・実行した経験から感じたことも多いのではないのでしょうか？

C: 私は、保健教育活動の企画に参加して、様々な事情や背景、制限の中で何が出来るかを考えていかなければならず、その中で限界を理解する必要性を感じました。

D: 1つの問題が、他の分野の問題と切り離せないこと、例えば保健医療の問題は教育や貧困の問題ともつながっていることを学びました。1つの問題に焦点を当てただけでは、完全な解決にはならないのです。理論と理想と現実の差というものを、初めて実感しました。

—他のことが印象に残った方はいらっしゃいますか？

E: 私は、カンボジアの方々と理想の将来像について話したことが印象に残りました。例えば理想とする将来像に近づくためには、教育が必要であることについては以前勉強していたのですが、他の部分、例えば政治に対する思いやその問題点など、実際に現地の方の表情とともに知ることが出来ました。

—このようなスタディツアーでは、AMDAの活動視察はもちろんですが、参加者同士の交流も魅力の一つだと思います。その点はいかがですか？

C: 確かに、スタディツアーは意見や考え方を発言したり聞いたり出来る場でもあり、自分にとってはとても刺激になりました。

D: 参加者それぞれが異なるバックグラウンドを持っていたので、1つの場面を見ても目の付け所が違うことがとても新鮮でしたね。

—ところで、ツアーの日程はいかがでしたか？

A: 朝、起床時間が早いのがちょっときつかったですね。

C: あの暑さに驚きましたが、バスでの移動中に適度に休息出来ました。

D: もう少し、現地の人々の意見を聞ける時間があるとよか

ったと思います。

F: とても充実していましたが、個人的には、もう少し小学校で子ども達と交流する時間があれば嬉しかったですね。

—連日の早起きとあの暑さにもかかわらず、みなさん体調を崩すことなくツアー全日程を楽しんでいただけで良かったです。ツアー期間中はレストランだけでなく、村で食事する機会もありましたが、カンボジア料理はどうでした？

A: 味が濃すぎず、日本人の好みにはあっていますね。海苔スープ、最高でした！

B: 私は密かにカンボジア料理にビビっていたのですが、とても美味しかったです。珍味（蟻と野菜の炒め物）もあったけど、まあそれもいい思い出です。

G: 私も蟻を食べたのは初めてだったけど、意外と普通に食べられて美味しかったです。

E: 私は、「下痢の予防」と「目の前の美味しそうな水や生野菜」の葛藤に苦しみました。

—では最後に、何かコメントがありましたらお願いします。

A: 私は今回 NGO の草の根活動を視察することが出来たので、次の機会には ODA の活動を見てみたいと思うようになりました。他の NGO などの活動にも参加し、勉強し、自分の考えをはっきりと持つことが出来たら再度 AMDA の活動に参加したいですね。その時はもっと大きな収穫があるだろうと思います。

E: 現地を訪問し、学べることを最大限に吸収するためには、もう少し事前勉強が必要だと思いました。他に、思うように現地の方と会話を進めることが出来なかったのが残念でした。通訳の方がいるものとばかり考えていたので苦労しました。

G: 今まで、学校の授業の時でも、日本に住んでいる私たちの生活価値観で、他国の生活のことを考えようとしていました。今回のツアーで現地状況を知ることの大切さを感じました。このツアー期間中に考えた色々な疑問点は、これから考えていきたいと思っています。

(この記事は、スタディツアー参加者を対象としたアンケートをもとに、回答者の同意を得た上で編集・掲載しております。写真の一部は、参加者提供です。なお、このスタディツアーは旅行会社、株式会社道祖神の主催で行われました。文責：竹久佳恵)



バイヨンの前で：2日目。アンコールトムを見学。

AMDAカンボジアスタディツアー



H C 見学：4日目。カンボジアの公的医療機関である保健センターを見学。保健センターに勤務する医療従事者から説明を受ける。



事務所で夕食：4日目の夜は、AMDA現地事務所に宿泊。現地スタッフと一緒に夕食を楽しむ。中には参加者が調理した料理も!



グループワーク：4日目。保健教育を参加者が企画。グループに分かれて、保健教育のテーマについてディスカッション。



マテリアル作り：保健教育は「衛生」について「手を洗う大切さ」を「劇」で表現することに決定。必要な材料を作る。これは「ばい菌」役用のお面。



練習：明日の本番に備えて練習。でも22時になると事務所に電気が来ない!急がなきゃ!



劇が始まる前：5日目。企画した保健教育をDoung村で行う。沢山の村の方を前に緊張。



劇：劇の様子。これは手洗いをしていなかった子どもが下痢になって、母親と一緒に保健センターに行った場面。



村で：劇を行ったDoung村で、村の保健ボランティアさん、集まった村の方々と一緒に記念撮影。



小学校で：5日目の午後は、日本カンボジア友好小学校へ移動。子ども達と、カンボジアの伝統的な遊びを楽しむ。これは石投げゲーム。



ACC見学：最終日。プノンペン市で運営しているAMDAカンボジアクリニックを見学。見学後は、カンボジアの保健衛生状況、AMDAの活動、プロジェクトについて、最終日まめとして活発な質疑応答が行われました。





スマトラ沖地震・津波緊急救援活動 友情プロジェクト (インドネシア)



みなさんのちからを
必要とする人たちがいます



株式会社 道 徳 神
The Travelers Guardian Inc.

〒108-0014 東京都港区芝5-13-18 MTCビル9階
TEL : 03-3455-6111 FAX : 03-3455-2442
〒530-0001 大阪市北区梅田2-5-25 ハービスPLAZA3階
TEL : 06-6343-7725 FAX : 06-6343-6328
ホームページ : <http://www.dososhin.com>
メールアドレス : info@dososhin.com